

暮らしを幸せシフト！映画「幸せの経済学」5月全国ロードショー

地震と津波に加え原発事故も加わった3.11東日本大震災。経済成長を優先させた結果、ヒバクシャを生み出す事態になりました。今後、どう動くべきなのか？ 私たちは今、時代が変わる境目に私たちは立っているのではないのでしょうか？

元に戻る？ 別の道を選び 幸せシフトする？

この質問への一つの答えは、5月21日(土)に渋谷アップリンクで先行ロードショーする映画「幸せの経済学」に示されています。人と自然との「つながり」を取り戻し、幸せで、真に豊かな暮らしを実現するには、どう暮らしたらいいのか？

キーワードは、「ローカリゼーション」。

詳しくは映画本編にて。監督は世界のローカリゼーション運動のパイオニア、ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ。もう一つのノーベル賞と知られるライト・ライブリフッド賞を1986年に受賞。ダライ・ラマ法王の訪問も受ける。著書、「ラダック懐かしい未来」は40ヶ国語に翻訳されたベストセラーとなっている。2月の監督来日試写会には合計1,000人が詰めかけるなど高い関心が寄せられました。5月22日(日)国際生物多様性デーには、すでに60ヶ所以上の全国の様々な地域で上映会開催が決定！暮らしの、社会の幸せシフトが始まる！

続きは「幸せの経済学」(shiawaseno.net)で検索。

Twitter アカウント「@shiakei」

映画「幸せの経済学」プレス資料

あなたは、「豊かさ」をどんなものさしではかりますか？

お金を持っていることでしょうか。便利で、快適な暮らしを送ることでしょうか。



40 の言語に翻訳され、世界各国で高い評価を得ている「ラダック懐かしい未来」の著者であり、世界のローカリゼーション運動のパイオニアでもあるヘレナ・ノーバーク＝ホッジさん。彼女の最新ドキュメンタリー「幸せの経済学」が 5 年の歳月をかけて 2010 年に完成致しました。この映画は、「グローバルからローカルへ」をテーマに、世界中の環境活動家たちがこれからの「豊かな暮らし」について語るドキュメンタリー映画です。消費型社会を見直し、地域に眼を向けることによって、その土地にある資源や文化を再認識し、人と人、人と自然との関係を紡いでいく「コミュニティの再生」の重要性を訴えています。

今まで世界では国の豊かさを測る指標として「GNP(国民総生産)」や「GDP(国内総生産)」などが使用され、どれだけ経済成長したかということが「豊かな国」と定義だと信じられてきました。この考え方はグローバリゼーションの波に乗って世界中に広がり、世界の様々な地域に「開発」という名の「消費社会」が流れ込みました。結果、便利で快適に生活できるなどの正の側面がある反面、負の側面ではコミュニティの伝統的な暮らしが崩壊し、かつてはそこにはなかったはずの「新たな貧困」が生まれるようになったことも事実です。

本当の豊かさとはなにか？それを、今こそ考える時ではないでしょうか。

◆これからのライフスタイルをつくるキーワード、「ローカリゼーション」

「幸せの経済学」は、開発という名の消費文化に翻弄されるラダックの人びとの姿を追い、世界の環境活動家たちが「本当の豊かさ」について説くドキュメンタリー映画。民族紛争や異常気象、多様性の損失、失業、アイデンティティの崩壊など、グローバリゼーションの拡大が引き起こす問題について述べながら、これらの解決の糸口となる「ローカリゼーション」について語ります。行き過ぎたグローバリゼーションから離れ、切り離された人や自然とのつながりを取り戻し、絆を強めていく世界各地のコミュニティや、ローカルムーブメントの成功事例も登場します。

3・11 という大きな震災を経験した私たちがどうやって持続可能で幸せな暮らしを作っていけるでしょうか？ 真の豊かさ、幸せとは何でしょうか？ この映画は幸せに暮らすためのさまざまなヒントを私たちに与えてくれます。

◆映画概要「幸せの経済学」

【作品名】幸せの経済学(The Economics of Happiness)

【HP】日本語: <http://www.shiawaseno.net/> 英語: <http://www.theeconomicsofhappiness.org/>

【製作年】2010 年 【時間】68 分

【プロデューサー】ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ(ISEC の代表者)

【監督】ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ、スティーブン・ゴリック、ジョン・ページ

【製作】The International Society for Ecology and Culture (ISEC)

【製作国】アメリカ、ニカラグア、フランス、ドイツ、イギリス、オーストラリア、インド、タイ、日本、中国

【配給・宣伝】ユナイテッドピープル株式会社 (<http://www.unitedpeople.jp/>)

◆「幸せの経済学」のストーリー◆



－ 物質的な豊かさだけでは、幸せになれない？ －

アメリカで毎年行う世論調査に「非常に幸福だ」と答えた人の割合は、1956 年をピークに徐々に下がってきています。50 年前に比べ物は 3 倍に増え「物質的」な豊かさの面では十分に満たされているはずですが、人びとの幸福感は毎年減少を続けています。私たちの幸せは一体どこへいってしまったのでしょうか。さらに、消費型文化の拡大により自然資源はもう限界まで達しており、このペースで生産を続けていくと地球の資源をすべて使い果たしてしまうといわれています。

「幸せ＝物質的な豊かさ」という定義が崩れ去った今こそ、経済成長の追求に代わる新しい「豊かさ」を考える時なのではないでしょうか。この映画は、これからの私たちの暮らしのあるべき姿の1つを教えてください。

－ グローバリゼーションが世界に与えるインパクトとは？ －

グローバリゼーションは、民族紛争や異常気象、多様性の損失、失業など私たちが直面している多くの問題を悪化させています。映画「幸せの経済学」では、グローバリゼーションの拡大が引き起こす8つの不都合な真実について順番に述べながら、世界各地で発生している問題について取り上げています。

そのうちの1つが、アイデンティティの崩壊です。物質的に豊かな消費文化の美化されたイメージが世界へと進出することにより、地域が持つ独自の文化がまるで「貧しい」かのように映ってしまうため、劣等感を生み出し、競争や対立を引き起こしているのです。その結果、本来の自分らしさを失い、世界は「均一化」され、都市にどんどん人が集まるようになります。この動きが、構造的にスラム街の増加や都市の拡大を加速させると活動家たちは分析しています。

また、グローバリゼーションは自然資源も浪費するとも指摘しています。これは消費文化による廃棄物や資源利用の増加だけではありません。グローバル化に不可欠な、生産者から消費者への長距離輸送にも原因があったのです。不透明な補助金や不適當な規制により、遠方の品物が近くのものより安いという不思議な現象がしばしば起こります。そのため利益率を上げるためにアメリカ産のマグロが加工のために日本へ空輸され、再びアメリカに戻るといった無駄ばかりの物流システムが生まれてしまうのです。これらの影響により世界のあちこちで土地に根付いた文化の消滅が進み、農地を失った多くの農民が自殺に追い込まれているといわれています。

－ 世界で巻き起こるローカリゼーションのムーブメント －

では、これらグローバリゼーションの拡大が生み出す問題をどうやって解決していけば良いのでしょうか？その解決の糸口が「ローカリゼーション」であると環境活動家らは語ります。グローバル経済では、人びとはその商品がどこから来たのか、その先を見ることができません。しかし、人間的な規模での経済では、自分の選択が及ぼす影響を直に感じることができるのです。人の手を離れ、膨れ上がってしまった経済を、私たちの手に取り戻すこと。経済のローカリゼーションが今、必要とされているのです。

また、映画の後半では、実際にローカリゼーションを実践するコミュニティをいくつか紹介しています。例えばデトロイトの都市菜園やトットネス（イギリス）発祥のトランジション・タウンムーブメントなど、持続可能な暮らしを目指すコミュニティが世界のあちこちで生まれています。また、地域のものを食べる（地産地消）運動「ローカルフードムーブメント」も、生物多様性、地域経済、コミュニティを復活させるなど、いくつもの効果をもたらしています。

大切な事は、私たちが進もうとしている方向は、地球の自然環境を守るだけでなく、我々人類の幸福感も取り戻すことでもあるということです。映画「幸せの経済学」は、失われてしまった人と人とのつながり、そして信頼を再び私たちの手に取り戻し、より良い世界を作っていけると信じて行動しようと呼びかけているのです。



地域で繋がら合おうという大事なキーワード「ローカル」を
しっかりと心に落としこんでくれる素晴らしい映画です。

キーワードは「Go local !」

丹羽順子(koko) — J-WAVE LOHAS SUNDAY ナビゲーター

私にとってのローカリゼーションは、自分が生きる場所を定め、その場所を愛すること。

そして地域の人達とつながりあうこと。

「ローカリゼーション」は世界をつなぐ普遍的なテーマだと思います。素晴らしい映画でした。

鎌仲 ひとみ（映画監督）

「幸せ」と「経済」と「社会」の連立方程式を解く大きなヒントがここにある。

持続可能性を損なうグローバリゼーションの彼方にあるのは何か……？

この映画を見ながら、きっとわくわくすることと思う。

枝廣淳子

本当の豊かさは、これまでの「より速く・より大きく・より多く」に替わる、3つの「S」（スロー・スモール・シンプル）の中にこそある。

3・11後の今、ヘレナの映画に導かれて、幸せへと「降りて」ゆこう！

辻信一（文化人類学者、環境運動家）

あなたが今どのくらい不幸せであるかということに想いを寄せることは出来ないけれど、

あなたが幸せになりたいと幸せ探しをしているのなら先ずはこの映画を観ることを“自信をもって！”薦めます。

龍村ゆかり（映画「地球交響曲」プロデューサー）

◆映画「幸せの経済学」の監督たち◆

<ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ>



スウェーデン生まれ。ISEC(International Society for Ecology and Culture)創設者、代表。世界中に広がるローカリゼーション運動のパイオニアで、グローバル経済がもたらす文化と農業に与える影響についての研究の第一人者。1975 年、インドのラダック地方が観光客に開放された時、最初に入った海外からの訪問者の一人で、言語学者として、ラダック語の英語訳辞典を制作。以来、ラダックの暮らしに魅了され、毎年ラダックで暮らすようになる。そしてラダックで暮らす人々と共に、失われつつある文化や環境を保全するプロジェクト LEDeG (The Ladakh Ecological Development Group)を開始。この活動が評価され 1986 年に、もう一つのノーベル賞と知られ、持続可能で公正な地球社会実現のために斬新で重要な貢献をした人々に与えられるライト・ライブリフッド賞を 1986 年に受賞。ダライ・ラマ法王の訪問も受けている。著書「ラダック懐かしい未来 (Ancient Futures)」は日本語を含む 40 の言語に翻訳され、世界各国で高い評価を得ている。

<スティーブン・ゴリック>



ISEC の US プログラムディレクターでもあり、スターリングカレッジの助教授。ローカリゼーションについて教えるとともに、各地で講演を行っている。家族と一緒に小規模の有機農場も経営。1998 年に出版された本「Small is Beautiful, Big is Subsidized」の著者。その仕事ぶりは、環境問題やサステナブルをテーマにした雑誌「The Ecologist」、「Resurgence magazines」に取り上げられている。

<ジョン・ページ>



ヘレナの前作品である映画「懐かしい未来 (Ancient Futures)」、ショートドキュメンタリー「The Future of Progress」のプロデューサー兼ディレクター。弁護士でもあり、10 年以上、ラダックプロジェクトの技術的・文化的なプログラムのコーディネートを担当してきた。発展とグローバリゼーションに関する彼の記事は、世界的に有名な環境雑誌「The Ecologist」にも掲載。現在、ISEC でプログラムディレクターを務めている。

◆監督からのメッセージ◆

私たちは 5 年という歳月をかけ、この映画を完成させました。今まで ISEC という団体で 30 年間、人類が直面している多くの問題の根本的な原因について広く訴えかけてきましたが、その中で、気候変動から金融危機など私たちが論争した最も緊急の問題の大部分は、持続不可能なグローバル経済システムによるものではないかと議論してきました。そして私たちは、これらの問題を同時に解決する重要な方法を見出したのです。それが、ローカリゼーションです。

この映画「幸せの経済学」は、単にグローバリゼーションの全体像を分析したものではなく、希望ある未来へむけての強いメッセージを発信しています。例えば、この映画に登場する思想家や環境活動家たちは、「文化的・生物学的多様性を尊重し回復させるためには、私たちの経済活動をローカル化させ、地域社会に目を向ける必要がある」と訴えます。彼らは、グローバル経済から脱却し、暮らしをローカルヘシフトさせることが、人を幸せにすると同時にエコロジカル・フットプリント(人間活動が環境に与える負荷に対し、廃棄物の浄化に必要な面積として示した数値)を減少させる魔法の

公式であると主張しているのです。

この映画にインスピレーションを受けた人が、少しでもローカリゼーションムーブメントに参加してくれることを願っています。なぜなら、ローカリゼーションの促進は、環境・経済の崩壊から私たちを救うだけでなく、私たちが生きる地球との繋がりを再発見させてくれるからです。そして最終的には、私たちの暮らしをより意味深く幸せなものにしてくれるのです。（ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ、スティーブン・ゴリック、ジョン・ページより）

◆映画に登場する世界のオピニオンリーダーたち◆

この映画には、世界中から集まった思想家や活動家、政治家など世界のオピニオンリーダーたちが登場し、様々な視点から見たグローバリゼーションについて、インタビューに答えています。

◎ヴァンダナ・シヴァ

世界的に著名な環境運動家であり、科学者、作家、エコフェミニスト。インドの首都ニュー・デリーを拠点に、NGO ナヴダーニヤを設立。20 年以上にわたって有機農法の研究と普及に勤めている。300 を超える論文を、専門誌に発表し、1993 年に「もう一つのノーベル賞」として知られるライト・ライブリフッド賞を受賞。オルターグローバリゼーション、エコフェミニズムの代表的論客としても知られる。「生物多様性の危機」著者。

◎サムドン・リンポチェ

インドのダラムサラに拠点を置く中央チベット行政府（チベット亡命政府）の首相。チベット人の僧侶、仏教学者でもあり、チベットの最高指導者であるダライ・ラマ 14 世の親しい友人である。チベット仏教学者としても世界的に知られており、マハトマ・ガンジーの教えについての権威でもある。

◎辻信一

文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授。「100 万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表。数々の NGO や NPO に参加しながら、「スロー」や「GNH」というコンセプトを軸に環境＝文化運動を進める一方、社会的起業であるスロービジネスにも積極的にとりくむ。著書多数。最新刊に『しんしんと、ディープ・エコロジー～アンニャと森の物語』（大月書店）がある。

◎ロブ・ホプキンス

ピークオイルと気候変動の解決に向け、脱石油型社会へ移行していく草の根運動「トランジション・ネットワーク」の共同設立者。この運動は世界 270 都市以上に広がり、日本でも NPO トランジション・ジャパンを中心に全国へ拡大しています。ホプキンスは、著名なイギリスのプロガーであり、多くの記事の作者であり、彼はイギリスでの環境保護運動の功労者を称えるシューマッハ・アワード 2008 の受賞者であり、アショカのフェローでもある。

◆ISEC とは？◆

映画「幸せの経済学」監督であるヘレナ・ノーバーク＝ホッジさんが設立した ISEC(The International Society for Ecology and Culture:エコロジーと文化のための国際協会)は、社会・環境問題の解決に取り組むイギリスの非営利団体です。民族紛争から生物多様性の損失、失業問題や気候変動まで様々な問題の根本の原因を探り、より持続可能で公平な暮らしのあり方を目指し活動しています。

ISEC ではこの 30 年、チベット、オーストラリア、南アフリカ、日本、アメリカ、イギリスと、世界中で何百もの講義、映画の上映、国際会議を行ってきました。本や記事、映画製作などによる啓蒙活動も積極的に行い、彼らが作成した資料は、世界中の教育機関や NGOなどで活用されるようになりました。これらは約 50 言語に翻訳され、世界中で高く評価されています。

◆ISEC が行ったプロジェクトとは？◆

◇LEDeG(Ladakh Ecological Development Group)

ISEC の活動は 30 年以上前、ヒマラヤのふもとにあるラダック地域での「ラダックプロジェクト」から始まりました。これは、観光化と開発により地域に流れこむ「理想化された消費型文化」から、ラダックの伝統文化を守るという草の根運動であり、この活動が後の「LEDeG」の設立へと繋がりました。グローバル経済の破壊的なインパクトに対し、ラダックの自立と誇りを強化するこの活動が評価され、ヘレナ氏はもう一つのノーベル賞と知られるライト・ライブリフッド賞を 1986 年に受賞しました。

◆前作、映像作品「懐かしい未来」について◆

グローバリゼーションの波に飲み込まれていくラダックの人びとの暮らしに迫った「懐かしい未来：ラダックから学ぶこと & 地域から始まる未来：グローバル経済を超えて」は、ヘレナさんの著書「ラダック懐かしい未来」を映像化した作品です。今回の映画「幸せの経済学」のプロローグともいえるこの作品は、「リトル・チベット」と呼ばれるヒマラヤの秘境ラダックで起きた急速な近代化、それによって大きく変化したラダックの伝統的な暮らしについて迫ります。アメリカの National Educational Film and Video Festival では、出品した分野の最優秀賞である Gold Apple 賞を受賞。未開の地であったラダックにおいて、グローバリゼーションが引き起こした伝統文化・自然環境の破壊は、私たちに真の「発展」や「豊かさ」の意味とは何か、ということを改めて訴えています。

◆「幸せの経済学」関連書籍 ◆



いよいよローカルの時代 ～ヘレナさんの「幸せの経済学」

グローバリゼーションに対する問題提起をつづけてきた環境活動家として名高いヘレナ・ノーバーク＝ホッジさんと、「スロームーブメント」の火付け役辻信一さんによる対談。世界的な文脈の中でローカリゼーションを論じる。

◎シリーズ監修 辻信一 企画・編集 ゆっくり堂 出版社 大月書店



ラダック 懐かしい未来

ヒマラヤの辺境ラダックに突如襲い掛かった近代化と開発の嵐。貨幣経済が貧富の差をもたらし、人々から時間と幸福を奪う。著者は、グローバリゼーションの本質と、それを超える道を明らかにすることを決意。ラダックに息づく深い伝統的な智慧が、その新たな道を進む鍵であることを示唆しています。